兵庫県現代詩協会　会報

特別号

２０１４年12月17日　発行：たかとう匡子

特別号
「阪神・淡路大震災から20年を想う」

兵庫県現代詩協会

詩を書くひとりとして

たかとう匡子

記憶をめくると、一月十七日が巡りくるたびに、神戸にはモニュメントがあり、回想の回帰があり、新聞やテレビでの報道があり、それが今年で二十回繰り返されてきました。そのたびに私たちには私たちひとりひとりのあの日の記憶がよみがえってくるというべきでしょう。二階の廂をそのまんま地面につけた家。割れた大地によって立つ根拠を失って、胴体をまっぷたつに裂かれた家。将棋倒しになったのや、横すわりのや、尻餅をついたのや、腰くだけのや、満身創痍のや。そしてあちこちの高層ビルの中間階がつぶれ、ビルとビルのあいだ、集合住宅と集合住宅のあいだに架かる空中歩廊が落下し、外れ、その瞬間に瓦礫となった私たちひとりひとりの街。こうして書いているとそれらひとつひとつをひっくるめるかたちで記憶は鮮明です。

神戸はたしかに、あの日から二十年経ちました。いわゆる大都市を直接襲った地震としては関東大震災に次いで神戸だったのですが、当時、まだ全国の詩人たちにとっては、地震への意識は今ほどではなかったように思います。けれどもそのあと、伊豆半島沖の群発地震、根室沖の、三宅島や小笠原諸島の、そして3・11東日本大震災の、というように日本の各地で頻発するようになり、とりわけ3・11以後は地震、津波、原発による放射能の危険性にまでその思いは及ぶにいたって、今では地震は日本中どこで起きても不思議ではない、自分たちの生活の、いのちの問題として受けとめられるようになってきました。

神戸では、三ヵ月後にアート・エイド・神戸の編集で『詩集・阪神淡路大震災　第1集』が「惨禍を越えて155名の詩人が証言する激震の世界」として刊行され、翌年の一月十七日には129名が鎮魂と再生を、そして二周年を前にして同じく129名の詩人による第3集『復興への譜』などが刊行されました。第1集「編集メモ」にはこの詩集に賛同し、参加した詩誌として「柵」、「叢生」、「アリゼ」、「MESSIER」、「現代詩神戸」、「第三紀層」、「灌木」、「海」、「輪」、「プラタナス」、「たうろす」、「火曜日」、「めらんじゅ」、「豹樹」、「風媒花」、「兵庫詩人」、「幻想時計」、「別嬢」、「BELLSAISON」、「播磨灘詩会」など神戸市内阪神間在住の詩人のみならず遠い地域の詩人たちの賛同も得たと記されています。まだライフラインもままならないのにアート・エイド・神戸実行委員会を立ち上げ、多くの詩人たちへの結集を呼びかけた伊勢田史郎さんらの迅速な行動がこういった大きな貴重な記録につながったのでした。

今思うのは、全国的にはこういった神戸での詩人たちの表現活動が「大変でしたね」という言葉とともに「あれは神戸でのこと」というふうだったことです。たしかに3・11は地震のみならず、津波、放射能があり、ジャーナリズムが集中する東京での体感や、水と空気、食べ物による汚染など、直接我が身にふりかかってきたこともあって、地震は全国の詩人たちの関心事となりました。けれども、考えなければならないのはそれでいいのかという思いです。

神戸はまさに大地震を原体験しました。そのうえに3・11でふたたび大地震を追体験したおかげで、私たち自身、我が身にふりかからなければよそごとですましていいかという問いを突きつけられたのではないでしょうか。阪神・淡路大震災から二十年。世界はそのあいだにイラクの攻撃があり、アフガニスタンでもスーダンでも、イスラエルやレバノンでも空爆があり、劣化ウランが使われたニュースも耳にしました。世界のあらゆることのなかに眼差しをそそいで、そのなかに私たちの神戸があった、一九九五年一月十七日から一日一日の日常が流れ、その積み重なりの上に今日という圧倒的な二十年目があったのであって、二十年というそこだけを考えても何の意味もない。そういう捉え方をする必要があるのではないでしょうか。あんなに大きな地震の原体験者として、詩を書く立場から、詩人の想像力を駆使して私たちは、神戸だけではない、日本だけではない、世界の同時体験の中で神戸はどうだったかを考えることが大事なのではないだろうかと私は思います。

★兵庫県現代詩協会の会報は年に二回の発行ですが、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災から20年を迎えるにあたって、特別号を発行いたします。協会会員の皆さんに作品を募集したところ、四五名の書きおろし作品が集まりました。／会報特別号編集担当〈大橋〉

兵庫県現代詩協会 会報　特別号　目次

叫び／あだちかつとし……03
時が揺れて／阿部由子……03
そのつぎは／安西佐有理……04
声（波のように）／井上修子……04
グラウンドにいたプレイヤーの20年間／入江田吉仁……04
祈／岩崎英世……05
鵜越／江口　節……05
寓話を置いてみて／大西隆志……06
なべて去ってゆく／大橋愛由等……06
朝の訪れ／和比古……07
風の中／かただときこ……07
十九歳になった孫Hへ／香山雅代……08
二十歳／神田さよ……08
業に苛なまれ／川田あひる……08
糸／小西民子……09
空中に置いた片足／佐伯圭子……09
再起した神戸／佐藤勝太……10
おどろく／在間洋子……10
この二十年／直原弘道……10
封を切って／たかとう匡子……11
声／高橋冨美子……11
あの日から／たかはらおさむ……12
死不起（スーブーチー）／谷田寿郎……12
風化／玉井洋子……12
おばあちゃんの下駄／玉川侑香……13
海峡の駅はいま／土屋宣子……13
変わりゆく色彩／中川道子……14
新しくなった扉のまえで／中島妙子……14
この場所で／中堂けいこ……14
阪神・淡路から東北へ　被災二十年に導かれ／西海ゆう子……15
炎のトルネード／西村好子……15
避難所／野口幸雄……15
兵庫（ふるさと）／平岡けいこ……16
輝く月に／福田さとる……16
光　ひと房／福田知子……16
窓の在り処／福永祥子……17
美談／藤井　清……17
沈黙の先へ／丸田礼子……17
20年を経て／三浦照子……18
あの日／水こし町子……18
うなだれて思うあのあと／三宅　武……19
祈り‥‥分断と再生／山本真弓……19
pass away／由良佐知子……19
過ぎ行く時間（とき）を／凛　清太……20
消えない虹／渡辺信雄……20

震災から20年を想う 45篇の 書きおろし作品集

叫び

あだちかつとし

一月十七日未明
多くの人が
倒壊した屋根の下から「助けて」と叫び
必死に救いを求める

私は飛び起きる
東灘の親戚はどうなっているか
電話は繋がらない

朝からずっとテレビを見続ける
長田から黒煙が幾筋も立ち上る
神戸の惨状が刻々と映し出される

夜の八時になって
叔母の家は全壊
家族は無事と連絡が入る

支援に向かう人々が増え
三万人が救い出される
すぐ炊き出しも始まる
寒い　寒い　寒い……

あの日から二十年
地域では自主防災対策がなされ
避難訓練が行われている
叔母は一〇一歳になり頑張っている

時が揺れて

阿部由子

まちが燃えている
「なんていうこと・・・」

ズンッという突き上げる衝撃で目が覚める
壁際の書棚からたくさんの鳥が飛び立つ
身体が大きく揺れる
階下で重い響きがして
ガラスの割れる音がこだまする

先夜から熱を出した娘を連れて病院に走る
待合室ではみんな押し黙って
テレビを凝視している

神戸が崩れ落ちている
黒煙が立ちのぼり　炎が空を焦がす

「なんていうこと・・・」

一時間も離れていないこのまちは
なにごともなかったように
いつもの時を刻みはじめている

十六年後　大津波が列島を襲う
メルトダウンが終わらない
その三年後　山津波がまちを呑みこむ

そのつぎは

安西佐有理

ワライゴトだ、まったく
ワライゴトだったのだ、せっかくにも
ワライゴトにすべきだったのだ、もっと
やさしさ、ほほえみ、つながりの
うすらさむい火の手があがり
陥没した（ひそやかな路地であった）尊厳を
ひびわれた（したしんだ壁であった）靭性を
舐めつくすまえに
何もない、もとより何もなかったことが
何ごともなかったように
何ということもなく何かであったことを
（こわれつくした、おおらかな更地）
ワライゴトにしなかったのは、何故か——
幸いなひとたち
明け方の震度1に、今もきっかり目覚める
あたたかな部屋の、わたしたちよ
（ひとときの、長い長い、揺れ）
一年、三年、十年、二十年、
百年たっても月は、太陽は、暗く翳ってそこにあり
電気はうっそりと通い
真冬の黒々した薔薇は病院の角に咲いて
想いとやらは、撤去された石垣の傍らに灰色の顔して
立ち尽くす、そんな、のどやかな夢は、ほつれ——
計測不能な針が振れる、とまどいのスペクトラム
経験の環の果てで、濾過される油のように
無情のことほぎが、ゆったりと手のひらへ落ちている
未来のひと
（かろやかな命であった）
もういない未来のひと
ようやくこの地に、ワライゴトは起きているか

声（波のように）

井上修子

運動公園で

公園を囲んで守る夾竹桃は
晴れた日の子どもが好きだ
のびた手足　はずむボール
強い日ざし　はじける笑顔
うんうん　でもね……夾竹桃は呟きはじめる
二十年前　ここには仮設住宅が並んでいてね……
風は　寄りそって耳を傾けている

あの夏

「ながいこと生きとったら
いろんなことがある」
安否を気づかう電話に　母は気丈に答えていた
川も道も　一面泥に埋まった　大水害
語りつくせない　戦火の傷あと
今　また　ゆれて崩れた　神戸の街

「ながいこと生きとったら
いろんなことがある」
耐えてきた多くを　冬着にあたためてくり返した

遠慮がちに　ひまわりが咲き
気がかりだった曾孫（ひまご）が生まれた
あの夏
九十三歳で母は逝った
小さな女の子は　もうすぐ二十歳になる

グラウンドにいたプレイヤーの20年間

入江田吉仁

おもて
被災へのわがこころ
いま、おろそかであること
なぜだろうか
また
いそぎあの災害の場に立ち戻り
おおいに復興を褒め
祝うこころ
の、ないのは
うら
よろこぶべきこころを抑えてよろこばざるは
被災地（グラウンド）内のプレイヤーこその
煩悩の所為ならん
流転せる苦悩の旧里はすてがたく
安養浄土は、
いまだむまれず　こひしからずさふらふこと
まことによくよく煩悩にさふらう
おもて
ゆっくりと語ってくれ
うら
しかるに、かねてしろしめして
煩悩具足の凡夫　とおほせられたることなれば
うみ・かわに、あみをひき、
つりをして世をわたるものも、
あきなゐをし、田畠をつくりてすぐるひとも、
おなじく
おもて、うら
こんなものでも人間なんだ、と言われるか

参考：歎異抄（講談社学術文庫）を借用

祈

岩崎英世

一冊の文集
祈
「忘れない　あの日のことを」
　阪神大震災記録

犠牲になった子ども達や保護者の
震災慰霊碑
　祈

あの日から
祈り続けてきた追悼式は
二十回目に

あの年に生まれた子は
二十歳の
成人式を迎える

「今の自分と私の夢」
「友とは人間とは」
「生命」…
子ども達の重い言葉が続く

避難所の生活
ボランティアの声

「語り継ぐ会」の
教科書として活用してきた

文集の
再版ができた

鵜越

江口　節

用意された壺がいっぱいになった時
まだたくさんの骨が　台上にあった
あとは　この山で丁重に供養させていただきます
斎場の係員が表情もなく宣言して
ちちははは　もう一度息子と別れた

幾年かのち　この山に新墓を建て
やっと一人分のかたちになって——
短い三十年を生き急いだ街が
山のふもとに広がっている

「自衛隊の手荒なスコップを断り
自分たちで少しずつ焼け跡を捜しました
横になった状態で母の骨が見つかりました」

二十年たってなおはっきり語る人の
眼は　そのとき
焼かれた母の顔を見ているだろう
骨の向こうに　苦悶の表情を見ながら
どの部位から骨を拾ったのか拾えたのか

一片の骨しかなく
一片の骨すらなく
街の土壌になった死者もいる
苦悶のかたちを埋め戻した街に
高層ビルがふえる、大きな墓石のごとく

木々の緑　鳥の声　遠く海から
光の献花

寓話を置いてみて

大西隆志

なんとか今日にたどりついた
一瞬の亀裂は
日々をバラバラにする
こんがらがった紐は断ち切られてしまうが
あらたな紐にとらわれてしまう
あの時、僕はどこにいたのか
日が当たる場所から歩いていた
寒い日、と記すが、それなりに暖かい日だったように
　も思う
記憶の曖昧さには理由があるのかもしれない
淡路の人、摂津の人、播磨の人、たぶんそれ以外の人
　もふくめて
僕はたいそうな揺れを身体とココロに受けてはいたが、
　直接的ではない
実質的な厄災は
ないにひとしかった
離れていたから、とはなんなのか
身体が覚えているのは
曖昧に距離をはかっていたこと
宙ぶらりんに時間を費やしていた
大変なことになった
職場には行けなく
彼女にも逢えなくて
家に帰りつき空襲があったような光景にカメラを向ける
カメラマンの憤りと撮影するしかないあり方に
ハラハラしながら
テレビを見続けてしまっていた
遠い場所であったり、未来と過去の境界を定位できな
いように
物語のなかに闖入したようだった
不謹慎な僕がいた、のかもしれない
他人事が膨らんで
物語に安心して
少しは自身を添わそうとしたが
なんだか嘘ぽかった
リボンを盗んだことが放りだされると
誰かが疑われた
ルソーも逃げていたのだろうか
愛おしさが差しだされた
詩人たちは詩をたくさん書き、それらには感動した
僕は感動を記さなかった
厄災のヒトになるのが嫌だった
詩を書いたこともないヒトの詩も読んでいて
急に寄り添う魚の群が浮かんできた
コトバのしまいどこや、コ・ト・バを身体に記すヒトは
脱臼できなかった
しばらく、コトバにビビったようだ
遅れてやってくるしかないのか
日々の暮らしの一瞬の崩壊は
いつも僕らを取り巻いているのか
積み上げられては
崩れていくしかない営為とは
コトバにつきまとっているストーカーの姿をして
去って行く
あらたにやって来る
僕は卑怯にも
差延を生きているようだ
ニューヨークのヒト
神戸のヒト、石巻のヒト
ガザのヒト
纏いつく場所は
どこにでもある場所をふるわせている
コトバにだまされるな、と言い
コトバを発せよ

なべて去ってゆく

大橋愛由等

ダンゴムシを
マヨネーズの空瓶に蒐めた
少年が去ってから
通り過ぎるだけの浜風
迷宮になりそこねた路地奥

記憶は重なることなく
冬のある日
地上のすべてが放逐され
地に直交するものは
廻向も帰巣も許されず
沈黙(もだ)のまま

そこにやってきたのは
(かなしみ)を自転しているモノたち
たがいに「いのちよ」と呼びあい
草文字を駆使して
気まぐれな留鳥たちに伝えようと
四季をうつろう

ツユクサが一九度目の花を咲かせたとき
庭石が失踪しはじめ
蛇の一族が南北軸に迷妄し
虫たちは翔ぶことをためらい
山風が路地の入口に立ちつくし
見知らぬ者が
幡(ばん)を立ててゆく
少年がふたたび
戻ってこられないように

朝の訪れ

和比古

丸いやわらかな顔をのぞかせ
おはようと
陽が微笑んでいる
阪神・淡路大震災の日
このような朝は訪れなかった

忘れてはいけないと思いながらも
記憶は次第に薄くなっていく
耐震のために家も改築した
二十年近くの歳月は
あっという間に過ぎていった
陽は何事もなかったように
背伸びして大きな欠伸をしている
今日も頑張ろうと
目一杯に顔を膨らませ
勢いよく飛び上がろうとしている

地震が起きた時間が過ぎ
座っている背景も明るくなった
柔らかいエネルギーを放出しだした
大きな体が次第にスリムになり
顔色に輝きを増してきた
かってガレキだった街に
大きな青い空が拡がる
鳥たちがさえずり始めた
一段高く舞い上がり
暖かな陽に近づこうとしている

風の中

かただときこ

このばしょはたしか
拡張された道路沿いにならぶ
高層の白壁に　あいまいな記憶

よみがえるのは平屋の路地から
魚を煮ている夕餉のにおい
おとしよりたちのすり足が聞こえ
おすそわけとおしゃべり

一月十七日
わたしが生きてきた時間に想像もしない光景が
かしましい町に叫び声があがり
避難所の体育館　玄関フロアーは
着の身着のままの姿で
あふれかえるひと　ひと
ことばは胸のおくでつかえ
眼がすわり体は棒のようにたちすくんだ

防災にかかる路地はきえ
おとしより達をみかけない
へりつづけていた地域の子たちも
足跡なくなり　小規模に一新された小学校の
むじゃきな子たちでふえつづける
若い町に大人たちのとまどい

繁華な街の夕どき
子どもをつれた女性のかいもの姿に
働くわかい力がふつふつ
帰宅の駅へいそぐ背にすうーっと
わすれないで

十九歳になった孫Hへ

―戦争を知らず大震災さえ知らずに育ち　今夏
大暴風雨の夕刻　語学研修の旅路についた若者に―

香山雅代

またたく
無限静謐へ
春風のように　親しく　発つ
自身を　瞬時　抹消した内部にひらけた
抽象の　夜明けに
未来から

―穏やかな小正月　未明の夢枕に顕れた夭折した少年
M。一九九五年二日後　十七日午前五時四十六分　M.
七・二
夢現のまま　洗濯機のなかの攪拌振盪さながらの十四秒
　つづきにつづいて笑ってしまいそう　傾いでいるであ
　ろう我が家地にめりこんでしまっているであろう異変
沈下七十糎　鎮まってざわめく声　北をみる　南をのぞ
　む　高速道路がない　湾岸道路も墜ちている　液状化
　の地上は泥どろ　道路の地割れ　ガスの臭い
一〇〇米西を北東へ　活断層が走ったらしい　甲東園の
　新幹線は落下今津線を塞ぐ　三日間の沈黙　昼の闇
水無し地獄　前夜帰ったはずの娘家族とたちまち五人家
　族の非日常的日常に一身重の娘ゆえ六人家族というべ
　きか一五十年前の終戦直後と変わらない驚かない日び
　の窮乏　泥濘を手を引き水汲みに通う孫との日課　コ
　ップ一杯の水で顔を洗い口を漱ぐ　（電気がともる）
朝ですよ！　気散じにカーテンを開ける二歳半の孫娘に
　テレビはご法度ぇ夜半に新聞で知人の消息を探す　津
高和一氏ご夫婦を別べつに発見　やるせないおもいだ
限りあるいのちの限りを　今を　個個に生きる人びと
揺れが身体に滲みつく　いくどとなく深呼吸をしてみる
道行く　見知らぬひとと交わす　歓び　温もりの言葉
笑顔　握手　別れの挨拶　瞬時の祈りを　星の瞬きに
生きて　会える近未来　のためのおもいの限りを　風に

二十歳

神田さよ

先生は予定どおり
教科書のページをめくる
崖に咲くスミレ
途方もなく切り立つ
沈黙
記憶　くすぶり
熱　こもり

息子は
生き生きとしなければならなかった
壊れたものを
噛み砕かなければならなかった
お腹いっぱい
不信
笑み浮かべ
手垢だらけのサンプル詰め込んで
家を出ていく

活きのいい言葉を釣り上げておいで
わたし
この子から
離脱

業に苛なまれ

川田あひる

三宮の真っ只中で
阪神・淡路大震災に遭った
ライトバンの窓を見下ろす赤い満月が
詩は要らない　告げた
どれほどの時間が過ぎたのか
また書き出していた
ホームヘルパーをしていた二〇一一年三月十一日の東
　北大震災
帰省中の所長が気仙沼で被災された
職場復帰された所長にヘルパー皆でカンパした
そのお金で実家に空気清浄器を送らせていただきました
さまざまな体験をお聞きしながら
知らずわたしは
春の湾眼球無き死帰りきて　指を折ってしまった
被災を自ら経験しながら
この酷い表現は
欲か
業か
生涯消せない汚点だ
詩でも一度やってしまった
完成度を優先した為に思いやりのない作品を残してし
　まった
これも消せない
せめて下書きせず告白して
良心はあるのか
見張りつつ
二十年の来し方としたい

糸

小西民子

あの日
柱に
糸を垂らす

あの時のまま
柱はすこし
かたむいている

おふろのタイルのひびも
そのままで

玄関のむこうでは
草がおいしげっている
二十年になろうとする
空地

それでもあの年
軒並み
巣をつくり
水道筋商店街を
つばめが飛び交う
にぎやかに育つ

かたむいた空から
糸はまっすぐ垂れている

空中に置いた片足

佐伯圭子

寒く暗い夜明けのころ
まどろみの中にいた暁闇
朝刊もコトリ　郵便箱に落ちたが
軒先から　音は始まった
ゴトゴトガトゴト
烈しく揺れ　揺れ

あれから二十年　今も体のどこかが揺れ
揺れやまず　揺れつづけ
どうして？
問うてみたいひとは傍にいなくて
遠い目をする

吹きあげて収まらない炎　煙
斜めにガックリ倒れたビル
押しつぶされた家
右往左往する男　女　子供　老いたひと
道を塞いだ瓦礫　裂けた高速道路
命が細って消えていく声も聞いた

揺れながら
駆け上がった二階もまた揺れて
怖さから抱き合い　水や食べ物を求め
それぞれの位置に向かおうとして
足を踏み出すと
階段が落ちて無くなっている

踏み出した片足
今も　空中に
置いたまま

再起した神戸

佐藤勝太

阪神国道の両脇に
倒れ崩れた家並の間を
リュックを背負って歩いた
訪ねる友人の家まで
瓦礫の行程は遠かった

瓦や雑木の中を掻き分けて
避難場所を探して訪ねた
家族は無事だったが
毛布を被って言葉は少なかった
人々は呆然と立竦み
成す術を忘れていた

あの阪神大震災から二十年
往年の活気を見せて
町並は癒えたように活気づいているが
あの日受けた心の傷は
今も疼いているはず
誰もが忘れたような笑顔で
闊歩している

背後の六甲の山並は
応援歌六甲おろしを奏で
神戸港ではドラの音が
出帆の合図を鳴らし続けている

おどろく

在間洋子

Would you kindly sign
for prohibition to Atomic Bomb?
原爆禁止の署名をお願いします
原爆資料館の出口に
署名用紙を持って立っていた
大学生になったばかりのころ

それは　原爆投下を受けたあの日から
わずか十五年後であったのだと
指折ってみておどろく
館内の展示物に目を覆い身震い
まなじりを上げ署名を呼びかけながらも
歴史の一齣としてとらえていたことを
告白しなければならない
痛みをこの身に引き受けていない
なんという軽さ

震災から二十年
えっ　もう二十年
指折ってみてまたまたおどろく

あの時　身に刻んだ怖れや悲しみに
わたしの心棒は平衡を失った
傾いたままのわたしである
八十二歳になられる被爆者が
当時の様子を夢に見て
目覚める　と今朝も語った
彼女にとって　七十年は一瞬の間
わたしにとって　二十年もまた
幾年月が降り積んでいくにしても

この二十年

直原弘道

崩れかけた家の瓦礫をかたづけ
雨漏りの屋根にブルーシートを張り
毎日遠いところまで水を求めてさまよった
その合間に瓦礫の街をさまよって
知人の安否をたずねてまわった
交通手段のなにもない町を
歩いて仕事場まで通った
わたしは六十歳すぎだが
まだ若かった
あれから二十年
わたしにはもはや
耐震構造へ家の補修をする力もなく
さらに生き延びる手だてもない
寿命がつきるのが先か
新しい大地震が起こるのが先か

封を切って

たかとう匡子

不用意にも封を切って読んでしまったの
きのうの夜のこと
差出人不明の分厚い
そのままにしておいてもよかったのに
ついつい
おかげでぎっしり詰まった文字にがんじがらめ
わたし迷いこんでしまいました
息ふきかえしたときはがらんどう
たいそう寒い
積みあげられたがれきのかたわらにうつむいて
しゃがみこんでいたそうです
一月の風が吹いて
振り落とされてはしがみつき
しがみついては振り落とされ
いうまでもないことですけど
けっして諦めたりなどしてなかったのですよ
小路ない
そこで遊んだわたしもいない
垣根からのぞくクマツヅラ科の紫式部ない
ないないづくし
でやけぼっくい
スピード走る
だだっぴろい道路
その脇に聳え立つ高層住宅群
やっぱり懐かしいあの人たちの姿どこにも見えません
しかたがないので
わたし
きょうはきょうはで待ちぼうけ
あした天気になあれ

声

高橋冨美子

助けて
助けて

押し潰された駅舎の近くを歩いてたら
壊れた家や
がれきのなかから
かすれてゆく声
うめき声
耳を塞いで家に帰ったの
ふた月後
無事を喜び手を取り合うなかで
そう告げる友人に
わたしは言葉を飲み込んだ
その場に居なかった者に
なにが言えよう
死に瀕したひとを
助けなかった
助けられなかった
取り返しようもない
あの朝のこと

助けて
助けて

聞こえてくる
消え入りそうな声
逝ってしまった友人も
わたしも
わたしたちも
重い荷物を背負ったまま

あの日から

たかはらおさむ

「十年ひと昔」というが
あの日からもう二十年　「ふた昔」
時は流れ　記憶は脳裡に沈んだが
まだ　消えないものがある
心の中の疼き　愛しい肖像
たぐり寄せる記憶の中の日々は
古い写真のように色あせてはいない

あの日　ぼくは目覚めたばかりだった
突然の揺れでタンスの上の花瓶が落ち
書棚の本が散乱し
食器棚から食器が飛び出した
テレビの画面には　火の手が上がる街の光景
出勤のために駅までいくと
マイクからは「全線不通」の知らせ

それから……数日……
辛うじて開通している路線の乱れたダイヤで
終戦直後の混雑のような車両で
迂回し時間をかけて……　やっと
埃っぽく焼け焦げた臭いが漂う瓦礫の街に出る

「復興」というかけ声の中で
表向きの町並みは化粧をしているが
あの日の傷跡は
日陰になったビルの谷間で
膿が残ったまま
ケロイド状になって残っている

死不起（スーブーチー）

谷田寿郎

重い瓦に
押しつぶされた
長屋門と母屋、
瓦礫の山をバックに
若いカップルが
Vサインで
カメラに収まっている。
観光気分と信じたくないが
にこやかな笑顔だ。
避難所への弁当配達の途中、
渋滞に巻き込まれて
トラックの運転台から目撃した光景。
あれから二十年―
生き残った喜びに溢れ、
ハンドルを握る手に
思わず力が入ったのも今は昔。
ハンドルを握った手を左右に振り、
道端をすり足で歩く毎日。
瓦の破片の隙間から
たくましくのびる雑草に出逢うたび
死者へ誓った再起への思いが甦える。
だが、ペンを握る力も弱くなり
文字も乱れる日々、
〈死んでも死にきれない〉死者の声を
遠くなった耳元で確と聞き取りたい。
そんな思いがつのり
〈死ぬに死ねない〉毎日だ。

（註）題名「死不起（シースーチー）」は中国の故事、「死ぬに死ねない」の意。

風化

玉井洋子

アスファルトに
お椀が
ひとつ

降ってきて
濡れてきて
何日もそのままに
霰うけ
砂埃あび

未明
巨竜が卵を産んだ
衝撃波

地面から建物がそっくりはぎとられ
ガレキとともにひとも消えた
ダンプが道々落としていった
遺失物

もう誰の
掌にのることもなくなった
木の器
天にむかって
ひらかれた円

アベリアの根方に
色さびてゆく
それはまだ
椀と呼んであげられる
ほどの風化

おばあちゃんの下駄

玉川侑香

まちを　ぐるっとまわってみたけど
わたしの住んだまちは
どこにもなかったわ

高層ビルが建った
あの下あたりやろか
震災の日に逝った　おばあちゃん
掘り出したおばあちゃんの下駄で
新しなったまちを　歩く

どこかで
誰かに　出会わへんかと

クマゼミがジージーと大きな声で鳴いてる

あんた
うちの庭の　セミ
違うわな
あの日から二十年が経つんや

あんたは
大震災を知らんセミ

杖ついとったおばあちゃんの下駄の歯は
ほんのちょっと斜め

シーカラン　シーカラン
おばあちゃんの下駄の音が
見知らぬまちに　響く

海峡の駅はいま

土屋宣子

知っていますか
あの日のあの時刻の
ＪＲ朝霧駅のプラットホーム山側
通称　列車線　と呼ばれる線路の上で
いつものように通過する筈だった貨物列車が
突然の海鳴りと地鳴りに包囲され
立ちすくんでしまったことを

一九九五年一月十七日未明
兵庫県南部を中心とする阪神・淡路大震災発生
震源地は対岸の淡路島だった
乗務員は何人だったのだろうか
全員無事に脱出出来たのだろうか
ほぼ確かな私の記憶では数十日もの間
斜めに傾いたままの姿勢で
執拗なまでの余震と凍てつくような寒風の中
転覆の恐怖に耐えていたことと思われる

報道は常にニュース性の高いものを最優先する
後世に語り継がれる各地の大惨状を思えば
ひとつの寸景にすぎなかったかも知れないが

二十年分の時間が流れ去り
風光明媚という名の明石海峡の傍を
今日も多くの電車や列車が行き交う朝霧駅

私の脳裡には今も
あの貨物列車があの時のまま一つのオブジェとなって
停まっていることなど誰も知らない

変わりゆく色彩

中川道子

どす黒い色が町をおおう
どの人の胸の内も暗黒
町は彩りをなくしてしまった

けれど人々はすごい
小さなタンポポの黄色から
町が彩りをあらわしはじめた

そして　あれから二十年

体は覚えている
余震におびえた日々
服を着たまま　枕元に靴　非常袋
いつでも飛び出せるように
あの時の感覚は忘れられない

家の倒壊はまぬがれたが
家具や食器が散乱した部屋の中で
小さく息をしていた老夫婦
「大丈夫ですか」と隣家の主の声
「はい生きています　有難うございます」
あの時の言葉は忘れられない

町にはさまざまな色が増え
明るい色彩を取り戻していった

毎月十七日は　防災の日
心を呼び戻す非常音が
町に流れる

新しくなった扉のまえで

中島妙子

凍った払暁
地殻から突き上げたものが扉を壊して
うちがわにあったものをいっきに放り出した
放り出されたものたちは
直視をためらう視線にさらされながら
どこからかあふれてくる原初のものがたりに
さわさわと浄化されて
その一瞬を永劫のうちにとじこめ
見えるところと見えないところで
つづきのものがたりが語られはじめた

露わだったものたちはふたたび
より堅固になった扉のうちにおさめられて
もうだれの目にふれることもない
うちがわでなおうごめいているものたちもすべて
視野からぬぐわれて
新しい扉は屹立している
扉のまえに立つものはもはや
精巧な認証なしにはそれを開くことはむずかしい
ぬぐうことのできない記憶だけが
遭遇したものたちの海馬にふかく刻みこまれて

扉は粛々と歴史のなかにあり
いのちあるものはみな
一炊の夢を無限の時間に溶融して生きている
過去からの声はとどかず未来のきざしは見えない
きのうひがしの海辺で約束された地のように
神話にまもられていた扉が一つ壊滅した
きょうまたどこかでどこかの扉がこぼたれる
遠い音を聞かないか

この場所で

中堂けいこ

なにも書かなくともすでに書かれた文字を
キイボードで押さえ
すぐちかくの坂のしたからパワーショベルの
それらしい響きは土の層をあつめたりひろげたりするが
つぎつぎに更地から
なにも身に付けない人がやってきて
かれらは足音をたてず宙をうくように折りたたまれ
しだいに曠野がそのまま湖になるその光景を
もう知っているのではないか
指先から洩れ出るわずかな水滴は光のなかで
うっすらとうきあがり
ゆきさきの無い場所をゆらす

阪神・淡路から東北へ
被災二十年に導かれ

西海ゆう子

一九九五年、私は未だ現役の働き手で
被災地といえどもその端に住んでいたので
失った物は徐々に買い換えられていった
ただライフラインが止まっても仕事があって
育ち盛りの子どもを抱えての大変な日々
火を使わずに食べられる食パンはいつも売り切れていた
あれから一六年
長年勤めた仕事を終えようやく第二の人生と
思い始めた矢先に大地は揺れた
忘れていた恐怖を身体ははっきりと覚えていた
子どもと共に続く余震に怯えていた日々が即座に甦った

退職した私にできるボランティアは僅か
訪れた東北被災地の無残な姿に心乱しながら
避難所や仮設住宅を廻って
中高年女性のハンドマッサージをしながら傾聴した
かける言葉もなくただただ聴き続けた
そこではかっての被災地から来たことを労われ
心を許して話されるひと言ひと言に代わって涙した
そこで出会った女性たちとのやりとりは続き
復興が実感できない現地の様子が伝わってくる
中高年女性に仕事は選べない
阪神・淡路大震災で知った
災害が弱い者により重くのしかかることを思うゆえに
時の流れに抗いつつ
震災を人災を忘れまいとする
あれから二十年
不条理なことに出会う度に
私は人らしく生きているかと問うてみる

炎のトルネード

西村好子

地鳴りがした
凄まじい大地の咆哮
大地は生きていて
テレビを投げ飛ばし
本棚を天井から剥がし大量の本を散乱させた
食器棚の陶器をなぎ倒し粉砕した
和ダンスの扉をねじ曲げ開き
寝ている人の上に覆い被さり圧死させた

煙が一筋、二筋
明け始めた灰色の空に立ち昇り
奇妙な静寂さが街に広がった
二日目の夜
山に逃げるように言われた
炎がトルネードのように跳梁し
広いバス道を超えたら必ずここに来ると

長田区は二日燃え続け一週間燻った
兵庫区は、バス道で止まった
生死を分けたのは一本の道

二十年経っても
ちぎれそうな階段をよく降りたものだと
感慨にふける

降りていなければ
私は圧死した
一本の道が無かったならば
私は炎に包まれた

避難所

野口幸雄

神戸市立長田工業高校　避難所に指定されてはいません
この日　住民が押し寄せたので校長先生が開門されたのです
災害対策本部は知りませんでした
1日過ぎ、2日たち住民に不安と不満がつのっているとの
情報が

「みなさーん　大変ご迷惑をおかけいたしました。災害本部
から派遣されてきました。もう大丈夫です。ご要望をな
んでもいってください。」
ハンドマイクはどなるように学校中をかけずりまわりました
水がない、毛布が、懐中電灯、オムツがほしい要望がどん
どん出されました
事務長さんと災害本部に実情報告　品物を受け取り急いで
ひきかえしました
その日から学校に泊まり込むことになりました

トイレが流せない　（これは困りました）
この学校には長年使われていない井戸があり
先生方が水を汲み上げられるように工夫してくれました
マンホールをあけて簡易水洗トイレも作ってくれました
すばらしい教師集団があったのです

なさけない私はたった2～3日寝ていないだけでもう頭も
体も動きません
一度自宅に帰してもらえる事になりました
自転車での帰り道　支援物資を積んだ車とすれちがいます
「ありがとうございます」（涙が出てきて止まりません）

爆睡しました　何時間寝ていたのかもわかりません
学校にもどり教室、体育館の場所ごとに世話役を募り自治
組織を作りました
これで支援物資の運搬、配布がスムーズにできるようになり
やっと普通の避難所になりました（私は10キロほど痩せま
した）

兵庫（ふるさと）

平岡けいこ

そして瞬く間に歳月は過ぎ
娘は二十歳になった
変わり果てた街の景色で
変わらなかったのは何だったのか
変わることを強いられた生活で
得たものは何だったのか

歳月の中で失ったものは何だったのか
失わなかったものは何だったのか
小さな灯を繋いで未来へ託す
新しい年を迎えるたびに
想う
あの日
どこよりも遠くて
何よりも哀しかった
愛しい故郷よ

輝く月に

福田さとる

長い揺れの後
大丈夫だと思われていた神戸は瓦礫と化し
夕方　うねうねとゆがんだ道を走った車
一月の月は煌々と照り輝き
知らない惑星の街を照らしていた

二十年を過ぎ
この惑星の上に幾度となくその月は輝いた
私は無為に時を過ごして来たのか
幾度となく私に問いかける月は
もう痛みを星の彼方に持ち去って
瓦礫の側に揺れるブランコもない

見えない糸が瓦礫から伸びていたのに
私はうまく聞けなかった
聞こえないふりをしていたわけではなく
ふさがれた口から聞こえる声は
新しい瓦礫が積み重なっても　新しい月が照らしても
何も出来なかった私の耳に聞こえなくなった

あのときのあなたは　もうすべてを知っていますね
私のことも
輝く月は未来を貫いて光っているから
きっと光は私たちの未来へ届くでしょう

ほんのかすかな思いを今あなたに
感謝して贈ります

光　ひと房

福田知子

硝子の雨を噛砕く　朝
水の影　光射す鳥たちの要塞
粉々の風　石砕く百瀬の
水　光　風　そして空

水鏡に映す鳥たちの空
鳴き声止まない水面の空
昨日見た夢を朧に孵す鳥たち
その卵から揚々とうまれる光の午睡

生き通すしかない決意のあらわれ
多重うつしの空
戻れない轍に射す光

緑の聲に誘われ　導かれ
険しい道もゆるやかに
掌（たなごころ）にそっと納める光のひと房

窓の在り処

福永祥子

東向きの窓を開ける
空いた場所に　しかとある
視えないものの存在

風が渡る
夕暮れていく湿っぽい空気の匂い
雑多なものに混じって
一日がすり抜けていく
失われていくものを
拒みきれないもどかしさ
たとえば死の間際
すべて取り返そうとしても
何ひとつ取り戻せない
愛用の湯飲み一個
髪の毛一筋　意のままにならず
内なるものの豊かさといえども
肉体を喪失してしまえば
それで　お仕舞い

豊かさに生涯を賭けるよりも
見極めよう
たったひとつの窓の在り処
存在の視えないことの
意味より深い真実を

美談

藤井　清

沈黙でしか語れない
悲しみの記憶
風に託して二十年
言葉を求めると
時空の木魂の中に生々しく蘇る

人間が人間を傷つけるのが日常的な
不信の時代だが
一九九五年一月の大地震の時
人間を支えたのは人間の優しさだった

「水あるでぇ水。水持ってってえー」
連日テレビから流れ
心に沁みたあのメッセージを
決して忘れることは無い

極限状態でしか
優しくなれない人間の業

あれから二十年
巡って来る一月十七日
この日を飾る
政治的美談に加担してはならない
僕は唯、人間の優しさを伝える
魂の言葉を見つける為に
一詩人でありつづける

沈黙の先へ

丸田礼子

大地が揺れて
燃えた街

一部始終見ていた
この目を閉じて

神のような人を
考えている

理不尽な
おびただしい死が

今も溢れているから
明日へ渡ってゆけない

扉を少し開けて
密かな声を聴こうとするが

膝を折り
組む手が痛い

天が破れて
大雨が降り

壊れていった夏の
失われた願い

諦めては諦めきれず
問いかける

20年を経て

三浦照子

窓外に拡がるレマン湖は陽の光を反射して美しく輝き、飛び交う鳥たちは紺碧の空に影を刻む。この美しい窓外の風景を脊にして、ジュネーヴの国連会議場では白熱した討論が続いていた。

×××

「公費解体」を錦の御旗に　築12年のマンションの214戸の住民はその住居を追われた。

再建後のマンションに復帰したのは、僅か半数程度、旧マンションのローンに加えて、新築マンションでの二重ローンに対応することは多数の住民にとって容易ではなかった。

×××

再建ではなく調査の上で修復をと願う住民は債務のない10数人と、調査を依頼した学者、そしてマンション建築に関わりのない建築会社であった。

×××

ゴミと瓦礫に変化する巨大な建造物の生命を守り、住民の経済的負担を軽減しようとする建て替え反対派の部屋には「殺されまっせ」という脅迫の電話や、郵便受けからホースで水を注入するなどの行為が後を絶たなかった。

×××

築後間もないマンションの役員は、殆んどが建築に関与した業者が大部分を占めていたが　エレベーターを止め　屋上の給水管を破壊し、被害のないC棟に移住している住民の早急な退去を迫った。

×××

住宅供給公社は強制執行の手段を用い、差し押えを強行した。「何か法律に違反したか？」「負債は一切ないのになぜ？」「社会的な迷惑行為はしていない」などの住民の意見に対して―住宅供給公社の命令―と老いた執達吏は繰り返した。当時報道関係、被災者クラブ、など関係者がマンションの室内、廊下に溢れていて、その様子は宏く報道された。

×××

以来20年を経過する、数年に及ぶ裁判や、業者による圧迫は、震災の恐怖に勝る悪夢であった。しかし、国連の決定は、私たちの訴えが採択されるという思いがけぬものであった。国連からは「ブリーチする」という内容の文書が関係機関に届き、私たちの訴えは結実した。長年裁判に係わった公社は、敗訴ではなく示談にせよと要求し、示談金を支拂うことで幕引きとなった。現在のように報道の方法も発達していなかった時代である。阪神のそして淡路を含む震災は国土の広範な地域に詳細を知られることはなかったが、被災した多数の人々の心底には、決して忘れられない悼ましい風景が常によみがえって来るであろう。

あの日

水こし町子

忘れよう
すっかり忘れてしまおう
あの日
私の家も全壊して
故郷に向かって
瓦礫を退かして出来た
車が通れるだけの道を
三日目に逃げたことも
生きている私は
忘れることができる
あの日
亡くなった人は
忘れることもできずにいる
二十年たっても
二十年は三日分位に圧縮され
時間はどんどん消えていくので
消えた時間の中に
老いた父も
老いた母も
老いた犬も
老いた鳥も亡くなった
あの日
亡くなった人の家に
電話をかけると
留守番電話は
亡くなった人の声で
のちほどおかけ下さいと
いつまでも繰り返した
あの日

うなだれて思うあのあと

三宅　武

そっくりだった　市内全域に満ちる　空爆後数年間の
匂いの記憶　匂いとともに　「焼け出された者同士」
のせつなく奇妙な連帯感も　似ていた

見通しのない会議「さしあたって」「これだけは」
「なにはともあれ」「当面」で迎えた初夏

屋根が落ちた木造住宅　斜めにかかっている額縁　油
彩　風景画　氷雨は絵に降り　畳に落ち

馬車が似合いそうな　十八世紀風アパレル専門店　リ
ュックを持たずマスクをしていない数名　店から出て
くる　「安かったわねェ」「こんなことでもなかった
ら買えないわねェ」「みんなに悪いけどねェ」駅方面
へ去る「お次のお客さま」の声　行列が動く

総合運動公園　十月三十日　こんなところにまだ並ん
でいた青いテント　あとで分かった　日本シリーズチ
ケット購入の行列

一年間　課せられなかった営業ノルマ　造っても　造
っても　間に合わず　督促電話に忙殺された自動車会社
会計事務所　相続税手続　例年の二倍

還暦記念の旅　歴史的街並み「どちらから」「神戸で
す」「ええっ　いかがでしたか」の語調　義捐金で旅
していたわけではない　被災地でも出す側だった街も
あった

うなだれて思う　あまたのエピソード

祈り・・・分断と再生

山本真弓

あの日　大地が割れた
みみず腫れした亀裂の中に
落ち込んでいく　魂
素足で破片の上を歩いた
痛みも感じず
手探りで夢中で　捜し歩いた
気づいたら　夜が明けていた
点々と続く　血の痕
片わらに居るはずの人は　早や
鉄砲玉のように飛び出して
どこにも　いなかった
撹乱した空間の中に
一人　取り残され　あえいでいた
三ヶ月が過ぎ　ようやく日常が戻ってきても
魂は　落ち込んだままだった
あの人との
つながらない距離を保ちつつ
私は　これまでの人生に終止符を打った

あの時と訣別して　もう二十年
遠いできごとのようでもあり
ついこの間のことのようにも思える
振り返るまいと思っても
あの瞬間を思い出すことがある
あの断裂は魂の断裂でもあったのだ
それから　一人歩いてきた
破片の上を素足で　黙々と

そして今　静かな時間がある
真の再生を祈るための　静かな時間

pass away

由良佐知子

「あれっ　とりは？」
久しぶりに訪ねてきて開口一番
すぐに遊びに興じる　こんなふうに

忘れられるのもいい
朝　鳥籠のおおいを外すと
水のみ場にもたれて蹲っている

昨夕まで止まり木で　羽毛を飛び散らしていた

一羽のセキセイインコが迷い込んで
日長　恍惚の毛繕いについやしている
刈っても刈っても繁る夏草の　若い胸毛は舞った
果てしない争いごとのように

てのひらにすっぽりと無音
半開きの艶っぽい目蓋　くしゃっと笑いかける嘴
長い尾羽と　風切りの藍

繕い物の得意なおばあちゃんがいた
夜長　靴下に古電球をあてがい
穴の周りを毛糸でかがる　寝込むまで

「あれっ　おばあちゃんは？」
すぐに忘れ　こどもの背は伸びる
あんなふうに　仕舞うのもいい

雲が先回りして
もうあそこに
―　pass away

過ぎ行く時間(とき)を

凛　清太

いま、空を見上げています
晴れ渡った、静かな空です
眼に入ってくるもの、耳に届く音、肌に寄り添う気配
そのすべてを研ぎ澄ませ
眼を閉じて、ゆったりと大きく吸い込みます
風景に溶け込んでいく私の心に
もう、過去へのこだわりや将来への不安も消え失せ
ただただ、ここに佇む、私しかありません
時間は止まっているかのようで、流れていて
その過ぎ去る時間の一コマ一コマに
私は「いまを生きている」と感じるのです
時間は
時にはいたずらな天使のように
時には残酷な悪魔のように
突拍子もない出来事の場面に私を連れ出し
幸、不幸の狭間を右往左往させ
片時も「いまを生きる私」を捉えて放しませんが
こんな日に、亡くなった近しい人のことを想うと
それはもう、悲しみの彩りなどあろう筈がありません
笑った顔、こわい顔、怒った顔、泣いた顔
うれしそうな顔、不服そうな顔、苦しそうな顔、
悲しそうな顔、どの顔も、言葉こそ交わせませんが
私にとって、至福の再会
私が生きている限り、あなたも生き続ける
もし、私が死んでも
あなたを知っている方が居られる限り
あなたは生き続ける、と呟きたくなります

時間を感じられることは「生きている」ことで
本当にありがたいことです

消えない虹

渡辺信雄

あの時
暗闇で震え
小さな蝋燭の灯に
導かれて
手を握りしめ
おにぎりを分け合い
口にはこんだ
仄かな手の匂いがした

（片付けが終わらないまま、歳月が過ぎた…）

放置されたままの家を
草が覆って

あの時
消防車が去ったあとに
一瞬
町を包む大きな虹がかかった
見えなかった人も
見た人が話す虹のことを
聞いたことだろう
〈虹の女神が橋を架けとる〉*
虹の伝説は
消えることはなく

＊は伊勢田史郎氏の詩「海の上の虹」より

★兵庫県現代詩協会事務局(会報発行所)／高谷和幸
〒676-0831 高砂市阿弥陀1-11-4　電話 079-447-3652

★特別号編集／大橋愛由等
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F

★特別号編集スタッフ／神田さよ・安西佐有理

★写真／掲載したすべての写真は、たかとう匡子が震災発生から数日間、神戸市長田区、須磨区の様子を撮影したものです。

★印刷所／社会福祉法人　新生会　新生会作業所
〒662-0913 西宮市染殿町2-11